



「ありがとう」は人間関係の潤滑油。一日に何度「ありがとう」が言えているだろう。毎日の自分を振り返り、思う。「私の一日では感謝と文句、どちらが多いだろう。」勿論、実際には計ることも数えることもできません。しかし、感謝があれば心は明るく、文句が多ければ心は暗くなる。心の明るさ、暗さは感謝と文句を測る目安となるかもしれません。先日、高校時代の先輩のお見舞いに行き、帰ってから気が付いた。「そうだ、あの先輩がいてくれたので、府立高校

であったのに聖書研究会が生まれ、そこで、ハワイからの宣教師にも会い、一年後輩の坂上さんにも会った。」

ということは、わたしがクリスチャンになり、結婚もでき、やがて、宣教師を送ってくれたハワイのマキキ教会に招かれることになり、今、子ども達がハワイとカリフォルニアで暮らしているのも、その結果！先輩がいてくれたからだ。いや、いや、これから先を考えるとどうなることか・・・。

しかし、あの先輩との出会いの御蔭で、「今」があると気付きました。帰ってからだったので「ありがとう」を言うには一寸遅かったのですが、この次、会うときには忘れずに言うことにしよう。「先輩の御蔭で、今の私がいるのです。ありがとう！」

一寸、気を付けて、見方を変えて見ると、感謝の鉤脈を掘り当て、「ありがとう」が生まれるうれしい生活の入口を見つけることが出来ると気づいた次第です。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」

(Iテサロニケ 5:16 - 18)